

4 番目の許婚候補

目次

とある上司達の会話	259
マナ	231
4番目の許婚候補	5

4番目の許婚候補

プロローグ 4 番目の許婚候補？

そもその始まりは、私、上条まなみが大学四年の二月のとある日。いきなり伯父さんが家に訪ねてきたことだった。

彼は、私のお母さんのお兄さん。

すごく大きな会社の社長さんをしている、とてもエライ人。

さらにお母さんのお父さん、つまり私のおじいちゃんもつとエライ人で、その大きな会社の会長をしているし、他の会社とか大学とかの理事にも名を連ねている雲の上の存在とも言うべきお人。いまだき信じられないけど、旧家らしいよ。ハハ。

ちなみに、そんなどえりやー人が親戚にいるけれど、私自身は思いつきり庶民です。庶民。理由は簡単で、お母さんが小市民のお父さんと結婚したから。

「舞の代わりに、お嫁にいつてもらうことになるかもしれない」

伯父さんが家に来て開口一番に言ったのは、そんなセリフだった。

「……はあ？」

私とお母さんは口をポカンと開けて、同時に聞き返した。

お父さんは仕事で留守だったけど、この場にいたら同じ反応をしたに違いない。

「どういふこと？」

つまり、こんなことだった。

おじいちゃんには共に学び、共に戦中の苦しい時を生き抜いた親友がいた。

その親友である佐伯氏と、ずっと以前から子孫同士を結婚させて親族になる約束をしていたらしい。

当初の予定では私を含む孫世代ではなく、子供世代同士が結婚するはずだったのが、佐伯さん方のお嬢さんが若くして亡くなったり、伯母さんが別の良い家柄のボンボンに見初められてさっさと結婚しちゃったりで、うまくまとまらなかったみたい。

で、次こそはと白羽の矢が立ったのが、私たち孫世代。

佐伯さんのところは男の孫が一人なので、その彼のところに三条家の血を引く女性陣の誰かが嫁ぐことになっているのだという。

「お母さん、そんなの聞いてた？」

私、あまりにビックリして伯父さんの話の途中で思わずお母さんに訊ねちゃったよ。

「うーん、姉さんや兄さんたちを結婚させたいって話があったのは聞いたことがあるけど、あんたたち孫世代まで、その縁談話を持ち越されていたなんて初耳よ」

私、というか、うちがそのことをずっと知らなかったのは「今までは知る必要がなかったから」、なのだそう。

何しろ会社経営とか財閥とか旧家とかにはまったく関係のない庶民だからね、うちは。

あと何より、三条の名を継いだ伯父さんのところに舞ちゃんがいたから。

舞ちゃんは私の従姉妹で、真正正銘のお嬢様だ。

綺麗で可愛くて、性格も優しく穏やかで、どこに出してもおかしくないサラブレッド。

同じ年の私としては若干コンプレックスを刺激されるものの、この上品でやさしい従姉妹が私は大好きだ。

家柄もふさわしく、佐伯さんのお孫さんの相手には、当然、舞ちゃんが選ばれていた。

彼女が二十五歳になったら結婚して、おじいちゃんの長年の夢を叶えるはずだった。

――が。

「ま、舞ちゃんが家出!？」

びっくり仰天して私は叫んだ。

まさに青天の霹靂だ。

「そ、そうなんだ。大学卒業を機に花嫁修業させて、そのうち佐伯さんのところの鞆人君と会わせる予定だったのに」

伯父さんは二月の寒い時期だというのに、うっすらと額に浮かんだ汗をハンカチで拭きつつ言った。

「好きでもない人と結婚するなんてイヤだと言って、出て行ってしまったんだ」

「ど、どこへ？」

「多分、大学の友達のところだと思うが……。今、使用人たちに探させている」

「あの舞ちゃんが……。家出……」

私は啞然としつつも、舞ちゃんに同情した。

いまだき許婚と結婚しろだなんて、そりゃ家出もしたくなるわよね。

「で、兄さん、家出した舞ちゃんの代わりに、うちのまなみにその佐伯さんのお孫さんのところへ嫁にいけと……?」

私が心の中で舞ちゃんをフレーフレーと応援している間に、驚愕からいち早く立ち直ったお母さ

んがすうつと目を細めて冷たい声を出した。

私はハツとした。

そういえば、そうだよ。伯父^{おじ}さんは私にお嫁にいつてもらうことになるかもしれないと言ったんだ。

「いや、もしかしたらの話だよ」

お母さんの剣呑^{けんおん}な表情を見て、伯父さんは慌てて手を横に振って否定した。

「舞が第一候補なのには変わりない。ただ、もし万が一、舞が佐伯さんの孫と結婚しなかった場合は、真綾^{まあや}か、真央^{まお}、もしくはまなみの三人のうち誰かにお鉢^{はち}が回るわけだ」

真綾ちゃんと真央ちゃんは、お母さんのお姉さんである伯母さんの子供たちで、同じく三条の血を引く私の従姉妹^{いとこ}だ。

真綾ちゃんは私より二つ年上で、真央ちゃんは一つ年下。

二人とも美人で才女でやさしくて、私の自慢の従姉妹たちだ。

伯母さんも大きな会社を経営している、いいところの家にお嫁にいったから、この二人も私とは違って真正正銘のお嬢様。

「……ということは、私は許婚候補^{いゝおまけ}の4番手ってことか」

真央ちゃんは私より年下だけど、家柄的にいって優先順位は上だろう。

三候補が控えているんだから、間違っても私のところには結婚話は回ってこないに違いない。

安心した私は、にわかには佐伯さんの孫とやらに興味が湧いてきた。

将来、親戚になる（かもしれない）人だものね。

「ねえ伯父さん。その佐伯さんって何歳？ 何の仕事しているの？」

「お、まなみ、彰人君に興味が湧いたか？」

脈アリと思ったのか、急にニコニコしだす伯父さん。

そしてカバンの中から書類を出して、私とお母さんの前に置いた。

「特別に見せてあげよう。受け取ったばかりの彰人君の釣書だよ」

釣書^{つしよ}ってアレだよ。縁談の時に取り交わす、身上書みたいなヤツ。

「へー、これが釣書。初めて見るよ、私」

いそいそと開いてみると、一番最初に目についたのが写真だった。

お母さんが横から覗き込み、取り上げてしげしげと見つめる。

「へえ、格好いいじゃない！」

「そうなの？」

私はお母さんの手にある写真を、身を乗り出して見てみる。

「本当だ」

そこに居たのは、ちよつとそこらではお目にかかれなくらいハンサムな人だった。

見合い写真というより、たまたま撮ったスナップ写真、それも隠し撮りっぽいもので、彼の視線はカメラに向いていない。けれどその写真からは頭が良くて抜け目がなさそうな人柄が伝わってくる。

ただのお坊ちゃまではなさそうだ。

ほんの少しだけ、私は自分が4番目の許婚候補であることを残念に思った。

こんなハンサムな人ならそばで見たいかも……

い、いやいやいや。

私は心の中で、ぶんぶんと顔を横に振った。

こんな鋭い目と視線を持った人は私の手に余る。

そう。彼がただのハンサムなお坊ちゃまではないと私に印象つけている最大の理由はその視線と目にある、と思う。

カメラの方を見ていないのに、彼の目つきは強烈だった。

鋭くて、冷酷そうで、何も見逃さないぞという強い意志が感じられる視線。

なぜだか悪寒がした。

この写真を撮った時、彼が何を見ていたのかは知らないが、彼にこんな視線を向けられる人にはなりたくない……

肩甲骨あたりがぞわぞわとするのを感じて、私は慌てて写真から目を逸らし、経歴のほうを見た。

ふむふむ。佐伯彰人さんは現在二十六歳らしい。

学歴もすごい。某有名私立中学、高校を卒業し、某有名大学出ときたもんだ。

何だか資格欄のところもすごいっぽい書いてあるし、身長だって一八〇センチを超えてるよ!

顔も頭も家柄も良くて背も高いだなんて、こんなパーフェクトな人がいるものなんだ。

感心する私の頭の片隅には、同じく顔よし、頭よし、家柄よしで背も高い別の男性二名の顔が浮かんでいた。

わが三条家の血を引く、うるわしき従兄弟ども二人……

前言を撤回しよう。

「パーフェクトな人なんて、この世にいるはずないのよ」

ボソッとつぶやきつつ、印字された文字を舐めるように見ていた私は、職歴のところまで目を留めた。最初に見た時は軽くスルーしちゃったけど……

『株式会社SAEKI情報システム 新事業推進統括本部主任』

——ええ!?

この会社って……私が四月から勤めることが決まっている会社じゃないかい?

第1話 佐伯（仁科）彰人というひと

「大きな会社だし部署はいっぱいあるから、よもや佐伯氏と一緒に職場になるとは思ってたなかったなあ」

六月。新事業推進統括本部に配属されることになってしまった私の第一声がそれだった。うちの会社の新人研修は、小さなグループに分かれて順ぐりに短期間各部署に派遣される。その研修が終わって、新人はそれぞれ決められた部署に配置されることになったのだ。

どんな呪いなんだろうか。

ロマンチストな女の子だったら「これは運命かもっ」と思うところかもしれない。けれど私はそうじゃない。研修中の短い期間とはいえ、佐伯氏を間近で見、私の心は警戒警報を発令していた。本当に呪いとは思えない……

研修期間、統括本部に回されて本人に出会う前に、私は彼の情報をばっちり仕入れていた。

——佐伯彰人。

私が就職したこの会社を含む、いくつもの大きな会社を統括する佐伯グループの御曹司。

本来なら本社でふんぞり返って仕事をしていてもいいハズの彼は現在、「仁科」という別の姓名乗って身元を隠し、グループ会社で就業中だった。

自分の能力を試したいと、コネを使わずに実力でこの会社に就職したらしい。

このことを聞いた時、私は彼に非常に親近感を持った。

だって私もそうだったから。

大学四年生になって就職活動が本格化すると、三条の親戚が、自分のところの会社にコネで就職しろとさく言い出した。

会社説明会に行ったり、何回も面接に行ったりする手間もなく楽に就職できるのは魅力的だったけど、コネなんて冗談じゃないぞ。

社長一族と親類だって知られたら、まともな人間関係を作れるわけがない。

同僚はおろか、上司だって私の扱いに困るだろうし、そんな中で仕事するのは針のムシロだ。

それに三条の会社に入ったたりなんかしたら、従兄弟の透兄さんにきき使われるのが目に見えていんじゃないか！

というわけで、必死に横槍をかわし、死に物狂いで就職活動し、私は三条グループにまったくかわりのない（ハズだった）この会社に就職を果たした。

まったく、いい家柄の親戚がいるっていうのも楽じゃない。

とにかく、そういういきさつもあって、私は佐伯彰人さんに親近感というか同胞意識をもったわ

けですよ。彼もきつと同じように思ったに違いないって。

そして、迎えた統括本部での新人研修当日、ドキドキしながら人事部長さんに連れられて件の人を紹介されたのだけだ。

一目見て、目が点になった。

め、メガネ着用ですかっ!?

しかも、髪型も違う!?

釣書の写真では下ろしていた前髪も、綺麗にうしろに撫でつけられていて、印象がまったく違っていた。

まさにエリートコースを歩んでいますよ、って感じのお堅いサラリーマンに変身していたのである。

こりゃ、ビックリだわ。

驚く私を尻目に、新人仲間の女の子たちは、彼に熱い視線を送っている。

メガネに隠されていても、佐伯改め仁科主任の美形はちっとも損なわれていなかったから。

自分に注がれる視線に気づいているのかいないのか、彼はそんな新人たちの反応に動じることな

く、やわらかい笑みを浮かべたまま挨拶をした。

「これから覚えることは沢山ありますが、できる限りこちらもフォローしますので、みんなで頑張ってくださいませよう」

顔に負けず劣らず魅惑的な声。低くも高くもない、艶やかなテノールはどこかセクシーに聞こえた。そう感じるのは私たち新人だけじゃないらしい。同じ部署の先輩女性社員の何人かも、うっとりしたまなざしを注いでいるのが見て取れた。

声も、容姿も、頭も文句なしのパーフェクトな男性。誰もがお近付きになりたいと思うはずだ。ところが。

そのやわらかい微笑みを見た瞬間、私の頭に警告音が鳴り響いた。

背中がぞわつとして、なぜかこの場からダッシュして逃げてしまいたい衝動に駆られたのだ。

理性的な部分では佐伯彰人氏を知的でハンサムで素敵な人だなあ、と認識しているのに、本能が「いつには近寄っちゃならねえ」と警告を発している。

け、警戒レベルMAX!?

自分のことながら、にわかには信じられない。どうしちゃったの、私の本能センサーは。

従兄弟の透兄さんと、同じく従兄弟の涼にしか発動したことなかったのに？

この人のどこに警戒する必要があるというのだろう。こんな素敵な人が、私のように平凡な新人社員を相手にするわけがないというのに。

思わずマジマジと凝視してしまったけれど、それは他の女性社員も同じで、とくに変だとは思われなかったようだった。

その後、統括本部での短い研修期間中、注意深く仁科主任を観察していた私だけど、警戒警報は鳴り止まないまま時間が過ぎてしまった。

自分でも不思議だ。

仕事には厳しいけれど、失敗するところがダメだったか丁寧に教えてくれるし、きちんと良いところは褒めてくれる頼りがいのある上司なのに。

なのに、どういうわけか近寄ると警戒してしまうのだ。

これは私に変なのだろうか……

そう不安になりつつも俺様&腹黒な従兄弟のせいで磨かれたこの「危険察知能力」を無視するわけにもいなくて、仁科主任には近づいちゃならない……と心に刻んだのだった。

なのにどうして同じ部署になってしまったのだろうか？

* * *

「仁科主任。頼まれていた資料です」

あああ、お近づきになりたくなんかない！

———と思っただけでも、仕事なので仕方ないよね。

私は内心の動揺を隠して仕事モードに徹し、仁科主任の机に近づいて頼まれていた資料を示した。仁科主任はちらっと私を見てから、資料に視線を落とす。

「ああ、ありがとう。そこに置いておいて」

「はい」

私は言われた通りに机の端に資料を置き、そそくさと自分の机に戻ろうとしたのだけれど——

「あ、上条さん」

なぜか呼び止められてしまった。

「は、はい？」

ギクンとしながらも振り返った私に、主任は渡したばかりの資料を手にし、メガネの奥でやわらかく微笑みながら言った。

「君の資料は速くて的確だから助かるよ。この調子で頑張ってくれ」

「は、はい」

おおつと褒められたぞ！

「ありがとうございます」

にっこり微笑むと、私は上機嫌で自分の机に戻った。

仕事でお世辞なんて言わない人なので、自分の仕事が認められて純粹にうれしかった。

主任がいるこの部署に配属になって四ヶ月。仕事にはだいぶ慣れたと思う。

が、相変わらず警戒警報発令中デス。

まあ、大所帯な部署なので、そんなに接近することはないのが幸いだ。

でも新人だから気を遣ってくれているみたいで、不意に声を掛けられることが時々ある。

これは私に限ったことではなくて、同じ部署に入ってきた新人仲間も同様なのだけど。

慣れてきたかどうか聞いてきたり、仕事上のアドバイスをくれたりと、気配りが行き届いている。

いえいえ、私に気を遣わなくていいので傍に寄らないで下さい！

と、たまーに言いたくなります。万が一、私の身元がバレたりなんかして、墓穴掘ることになったらイヤだから言わないけど。

これまでも実は、ヒヤッとさせられたことがある。

それは、配属が決まってほんの間もない頃のこと。

頼まれていたとある会社のデータを仁科主任のアドレス宛にメールで送ってひと息ついた私は、お茶でも飲もうと思つて席を立ち、給湯室に向かった。

その時、ちょうど会議から帰つて来たばかりの主任と廊下でバッタリ出くわしたのだ。

「あ、主任、頼まれていた資料、メールしておきましたので、確認お願いします」

警戒心を押し隠して、私は報告した。

主任は私の前で立ち止まつてにっこり笑う。

「ああ、ありがとう。席に戻つたらすぐ確認するよ」

本来ならそこで終わるはずの会話だった。

だけど、その時は違つた——笑顔を消した主任が不意にこんなことを言ったからだ。

「失礼なことを聞くけど、上条さんと俺つて、前にどこかで会つたことある？」

「——へ？ しゅ、主任とですかっ？」

声が裏返つてしまった私を誰も責められないと思う。

いきなりバレちゃった……!?

心臓がバクバクした。顔から背中からどつと冷や汗みたいなものが出てくるのが分かる。

「ああ、いや、勘違いかもしれないけど、どこかで見たことがあるような気がしたんだよね。最初に研修に来た時にもそう思った」

じっと私の顔を見つめる仁科主任。

許婚として佐伯家に紹介したのは舞ちゃんだけだと聞いていたけど、もしかして私たち全員の資料を渡していたりするのだろうか。そこで私の写真を見た……とか？

じりじりと冷や汗をかきながらも、私は頭の隅でそれを否定した。

この人は恐ろしく記憶力がいい。最近見た写真だったら「どこかで見た気がした」なんてあいまいな記憶の仕方はしないはずだ。研修の時に私の素性に即気付いているだろう。

「い、いえ、会ったことはないはずですけど……」

私は答えながら、ぐるぐる考えた。

どこから素性がばれるか分からないから、下手なことは言えない。だから探りを入れることもできない。

だって藪を突いたら蛇が出てきそうなんだから！

「そうか。記憶力はいい方だと思っただけど、どうも思い出せない。だからこそ気になるんだが……」主任はそう言つて眉を擡めながら言葉を切る。

私はヒヤツとした。「だからこそ気になる」の部分に。

私の素性を怪しまれて探りを入れられたりなんかしたら、それこそヤバイ。

「もしかしたら、君に直接じゃなくて、君に似た人に前に会ったことがあるのかもしれないね。だったらすぐに出てこないのもうなげける」

「そ、そうですか……私に似た誰か……」

思い当たることがあつて肝が冷えた。

お祖母ちゃんだ。

五年前亡くなった、お母さんのお母さん。佐伯さんのところのお祖母さんと友人だったという、私の祖母。

若い頃の顔が私とよく似ていて、祖父母の友人には例外なく「おばあちゃんにそっくりね」と言われてきた。

年を取つてからの姿だとしわくちやでそうと分からないけど、昔の写真なんかを見ると私が見ても一瞬自分が写っているのかと思うくらい似ている。

……もしかして、主任は昔のお祖母ちゃんの写真を見たことがあるのかもしれない。

だって、主任のお祖母さんと私のお祖母ちゃんは、お祖父ちゃん同士が親友だったことから昔からの知った仲で——だからこそ孫同士を願つたのだ——当然、昔の若い頃に撮つた写真だつて残

っているだろう。

うちのお祖母ちゃんと主任は直接顔を合わせていてもおかしくない。

だけど、そのことを思い出されたら私は破滅だ！

祖母の友人に似ているからって即親戚って勘ぐられるわけではないだろうけど、怪しまれたらアウトだ。面と向かって嘘をつけるかどうか……

「そう、その大きな目に見覚えがある気が……」

そうつぶやいた主任の手が私に伸びる。

それはあまりに自然で、おそらく本人も無意識の行動だったのだろう。

だから私はその顔に伸ばされた手にまったく気付かず、視界に手が映って初めてその事実気付いたのだった。

私の顔の十センチ横に、主任の手があった。

それは間違いなく私に伸ばされていて――

だけど私はその手の存在に気付き、ハッと目を見開いたところで視界からソレは消えていた。

瞬きを数回した後、目の前の当人を問いかけるように見上げたけれど、そこには何事もなかったかのように普通の顔をした主任がいて、私は夢か幻でも見た気分だった。

触れようとしていた？ ……気のせいかな……？

「さつきから変なことを言ってますまないね。忘れてくれ」

主任が苦笑しながら言った。

「い、いえ、大丈夫です」

「資料ありがとうございます。さっそく席に戻って確認するから」

「はい。よろしく願います」

爽やかな笑顔を残して、主任はまるで今の一連のことなどなかったかのように、部署に戻っていた。

だけど、私はこの一件のことでますます主任を警戒するようになった。

私の顔とお祖母ちゃんを結び付けられるのを恐れて、仕事でやむを得ない場合を除いて、なるべく近寄らないようにした。

それはある程度、成功していると思う。

だってあれ以降主任から、私が誰かと似ているだとかいう話はまったく出なかったから。

「上条ちゃん、さつき仁科主任に褒められてたね」

机に戻った私に、隣の席の水沢先輩がこそつと声をかけてきた。

水沢さんは部署に入りたての頃、私に付いてくれた教育係だった二歳年上のお姉さまだ。

美人というよりかわいいい感じの人で、明るくて元気でパワフルで、わが部署のムードメーカー。おまけに仕事だつてきちんとこなしている、とても優秀な人なのだ。

「はい。仕事が認められたみたいで嬉しいです」

「実際、上条ちゃんはいいい仕事してると思うよ。速くて正確だし、理解速いし」

「わあい、水沢さんにまで褒められた！」

仁科主任もそうだけど、水沢さんもあんまりお世辞を言ってるところを見る人じゃないから、これは私の仕事ぶりがなかなか良いってことだよな。

ああ、頑張つてこの会社に入つて良かった！

もしお祖父ちゃんの会社にコネで入っていたら、きっと同じように褒められても、私はそれが本当かなつてずっと悩むことになっていたと思う。

仕事良かったからなのか、それとも三条の親戚だからそうお世辞で言ってくれてるのかな……とかさ。

ただどこではそんな風に氣遣われることはないのだから、純粹に私への評価だと受け止められる。

「ところでその仁科主任について、最新情報があるのよにやり。」

周りの人に聞かえないように声を潜めて言う水沢さんの顔には、楽しくて仕方ないとも言いたげな笑みが浮かんでいた。

「仕事中におしゃべりはできないから、お昼休みに言うわね」

ああ、またですか……

水沢さん、実はかなりのゴシップ好きだ。

誰とでも打ち解けられるその性格を生かして、いろいろな所から情報を仕入れてくる。

同じ部署内はともかく、全然接点のない部署の人間関係とか、誰と誰が付き合つてるとか別れたとかの情報まで把握してるっていうんだから、もうすごいとしか言いようがない。

その情報収集能力ときたら、スパイも真つ青つて感じ。

その能力を以つてしても秘密だらけの仁科主任の素性は今のところバレてないようだけど、素行については週刊誌並みに嗅ぎつけて暴露されているんだよね。

ホント、美形で人気あると大変だ。

仁科主任本人は自分の私生活が噂されているのに気付いているのか分からないけど……

ちなみにその素行っていうのは当然、女性関係です。ハイ。

「ええっ、F社の美人秘書さんとはもう別れたんですかあ？」

同僚がすっとんきような声をだした。

昼休み、会社近くのカフェでランチをいただいたあと、私たちはそのままお茶タイム^{イコール}ゴシップタイムに突入した。

メンバーは私と水沢さんを含め四人だ。

「ちよっと、声でかいよ」

口到人差し指をあてて、声を落とすように圧力をかけたあと、水沢さんは声を潜めて話し出す。

「そうらしいのよ。F社に勤めている友人がいるんだけど、彼女が言うにはその美人秘書さんがフリーになったっていう噂が社内を駆け巡っているんですって」

「ほえー。付き合い始めて三ヶ月しか経ってないですよね。たしか」

「そうね。その前に付き合い合っていたC社のやり手営業さんが半年続いたことを思えば、短いわよね」
クスツと笑って言ったのは、我が部署のマドンナの存在の川西^{かわにし}さん。彼女は水沢さんの同期で有能かつ器量よしなお方だ。

でも性格はとてもサバサバしてて漢^{おとこ}っぽい。姉御肌っていうんだろうか。

噂によると、こっそり「川西女史」とか呼ばれているらしい。

「きつと早々にお付き合いのその先を望んでしまったのでしょね。いつものパターンよ」

あらら、川西さんだったら、バサツとF社の美人秘書さんを斬りましたよ。

つまりですね。

仁科主任が付き合っている女性と別れる原因って、ほぼ相手の女性が将来を……ええとつまり、結婚を望むようになるかららしいんだよね。

でも主任は結婚をする気はなくて、付き合う女性にもそのことをはっきり最初から伝えてあるよ
うなんだけど、何ヶ月か付き合っているとやっぱり女性は期待しちゃうんだよね、結婚。

主任のお相手は美人で有能でキャリア志向の強い女性ばかりみたいだけど、そこはやっぱり女
ですから。

とくに相手が仁科主任みたいに男前で将来有望となると、その先を望んでしまうっていうのも分
からなくはない。

でも、結婚の二文字を仄^ほめかそうものなら、即アウト。

女性は過去の女^{むすめ}になってしまい、新たな蝶々たちが甘い蜜を持つお花に群がるってわけ。

情報通の水沢さんによれば、主任の過去の女性はほぼ一〇〇%向こうからお付き合いを望んで近
寄ってきた方々で、主任から交際を申し込んだ人はいないらしい。

もう入れ食い状態。

きつとすでにF社の美人秘書の後釜を狙って、女性たちが主任に言い寄っているに違いない。ここまでくると何様よアンタ、と思うでしょ？

でも主任の気は落ちないんだよね。

大きな要因の一つとして、彼が付き合う女性っていうのが全員他の会社の人で、SAEKIの女性社員とトラブルを起こしたことがないっていうことがあるだろう。

きちんと自分の中で一線を引いているらしくて、おかげで振られる我が社の女性社員が後を絶たないけど、その姿勢を貫く姿がストイックに見える……みたい。

あと、主任ってとにかく仕事第一って感じで、結婚を忌避している理由も仕事を優先しているからって思われてみたい。

本当は親が決めた許婚がいるからんだけどねっ！……多分。

実は、私はこの仁科主任の女性関係を知った当初はひどいカルチャーショックを受けた。

何しろ中学高校と女子校だったから男の人あまり免疫がなくて、当然付き合った人もなし。

大学はこれじゃいかんと思って普通の男女共学にしたのに、男が傍にいるっていう状況に慣れるのに時間がかかって、結局恋人を作るところじゃなかった。

おかげで未だに処女でファーストキスもまだ……

そんな恋愛未経験者の私には、仁科主任の女性関係はとても理解できることじゃない。

許婚である舞ちゃんがいるのに、どうして別の女性と付き合えるんだろう。

しかも、とっかえひっかえしているなんて、不潔よ、不潔！

って、入社直後は思っていたんだけど、さすがに半年も社会人やって、学生時代とは違うアダルトで生々しい男女関係の片鱗を耳にすると（もちろん、それは主に水沢さん経由で入っている社内ゴシップだったりする）私の考え方が古いのかな、という気がしてます。今は。

なので、結婚前だったら仕方ないのかなと意見を修正中。

実際、許婚っていうのはまだ正式じゃないみたいだし、表面上は仁科主任だって舞ちゃんだってフリーなんだし。

結婚後に恋人作られるのはカンベンして下さいって感じだけど、結婚前ならお互い大人なんだから……ねえ。

ぶっちゃけ、そう思えるのは私が許婚の筆頭じゃないからなんだけど。

「あーあ、うちの会社の人とは付き合わないって決めてるんじゃないかなければ、私も主任を狙うんだけどな」

どうやら話は続いていたようだ。川西さんはコーヒートをフーと冷ますように吹きながら、そんな

ことをのたまう。

もつともこれは本気ではない。

だって入社直後、女子新人社員からの――

『あんな格好良くてエリートな独身男性がいるのに、好きになつたりしないんですか？』
つていう質問に、

『ああいう柔和な笑顔が似合うタイプは、趣味じゃないのよね』
と彼女は答えていたから。

「フリーになつたつて言つても競争率高そうだよ、主任。秘書課の面々が軒並み狙つてるつて話だし、すでに何人も玉砕してるよー」と言つて、ケラケラ笑う水沢さん。

そんなことまで把握してるんだ。情報通つて恐いなあ。

「うちの部の女子もみんな主任に憧れてますしね。まあ憧れ止まりですけど」

うんうんとうなずく同僚に、私は適当にあいづちを打つ。

「ですねー」

多分全員じゃないと思うけどね、と内心思いながら。

だって私は、ちつとも憧れてないから……

どつちかという避けたい。

もしも私がネコだったら、主任が近づくとたびに毛を逆立てて「フシャー」つてうなつてると思

う。つまり、警戒心バリバリなのだ。

そうは言つても私も社会人だから、表面上は普通に接してる……つもり。

将来親類になるつていうのを考慮して、多少距離をおいて普通の部下と上司の関係でいるのが無難かなーと思つてさ。

でも、こうして仁科主任の噂をしたり、他部署の女性社員が主任に熱い視線を送つてているのを見ると、どことなく優越感を感じているのも事実だつたりする。

あのねー。

あの人は本当はこの佐伯グループの御曹司なんですよ。

身元を隠して就業中なのですよ。

しかも親の決めた許婚いひよめかけがいたりするんですよ。

そしてそれは私の従姉妹いとこだつたりするんですよ。

でもつて、従姉妹がダメだつた場合、4番目の許婚候補が私だつたりするんですよ。

うふふ。

とか、自分一人がみんなの知らない秘密を握つていてという事実まじに悦よろこんでいたり……するんだよね。

ああ、私つてば、ちよつと腹黒いかも。

まあ、いつかは私が知っているという事実を仁科主任も知ることになるんだろうけど。ただどそれまでは、生暖かい目でじっくり観察させてもらいますからね——佐伯彰人さん？

第2話 三条家の人々

「で、まなみはどういう部署で仕事しているんだ？」

正月。新年の挨拶に三条家に行った私に、おじいちゃんが言った。

そういえば、前回この話題が出た時は五月で、まだ所属が決まる前だったから言っただけじゃなかったわけ。

えーっと……部署名言っちゃっていい？ 大丈夫？

舞ちゃんが何かの理由で許婚いんせうけにならなかつた場合、まかり間違つて「同じ部署の上司と部下の間柄で、親しいだろうから」なんて理由で真綾ちゃんや真央ちゃんを飛び越えてこっちにお鉢はちが回ってきたりしない？

「……」

ハイ。ここで警戒スイッチオンです。

「えーと、事業推進部つてところで、事業立ち上げの計画にかかわったり、製品の売り出しのための戦略を練ったりする部署に所属になったの。……で、私のグループは主に同事業を展開する企業

の調査と動向を測ったりする仕事してる」

う、嘘じゃないですよ。やっている仕事も内容も。

ただ……部署名が正式名称とは若干違うってだけで……

たまたま同じ部屋にいた従兄弟の透兄さんが、私の顔をちろつと見たような気がしたけど、それは本当に気のせいだと思いたい……

「上司にセクハラされたり、いじめられたりしてないかい？ 嫌なことがあったら、すぐにおじいちゃんに知らせるんだよ。おじいちゃんの会社にいつでも転職すればいいんだから」

と心配そうに言われて、私は慌てて首を横に振った。

「もー、おじいちゃんたら心配性なんだから。会社の人、みんな良い人だよ！」

「だけど、まなみはかわいいし、女子校育ちで男にあまり免疫ないからなあ。変な男にだまされなにか、うちの男連中はみんな心配してるんだぞ。うちの会社にいれば、透が目を光らせて守ることもできるけど、よその会社じゃなあ」

おじいちゃん……爺バカですよ、それは。

舞ちゃんや真綾ちゃんや真央ちゃんは美人だけど、私はちつとも綺麗じゃない。十人並みもいごと。

「気にしすぎだって。大学でもそうだったけど、会社でも私、全然モテないんだから。それに今は仕事が面白くなってきているから、恋愛なんて二の次」

というか、仕事が面白くなくても恋愛できるかどうかは疑問だけど。

小学六年生の頃、男の子にいじめられて以来、私は軽い男性恐怖症だったりする。

ちょうど中学受験の時期だったこともあって、おじいちゃんの薦めで中高一貫の女子校に通うことになり、男の人が傍にいない生活を送ってきた。

関わりのあった男の人といえば、親戚関係くらいなもの。

そして六年間女子ばかりに囲まれて生活していくうちに、いつの間にか男性恐怖症は治ったけど、彼は氏はおるか恋愛にもまったく疎くなっていた。

「これじゃいかん！」と大学は共学のところにしたけど、知らない男の子が傍にいるという状況に慣れるのにかかなりの時間がかかった。

合コンに行っても何をしゃべっていいのか分からなくて、携帯番号の交換すらできずに終わった日々。

結局、何もないうまま就職活動に入ってしまったって、今に至るといわけ。

会社でも同僚や先輩の男の人の傍にいてもドキドキしないなあ。

唯一、傍に近寄られるとドキドキするのが仁科主任だけど、それは警戒スイッチが入っているからであって恋愛感情じゃないし……

「まなみが仕事第一だつて言つても、お前を狙つて言い寄つてくる男がいなくても限らないじゃないか。まっとうな男であればいいが、いい加減な男も世の中には多いし……。うちの会社にくれば、そんな男をまなみに近づけずにすむんだがなあ……」

あくまでおじいちゃんは、私を自分の会社に入りたいという気持ちを隠さない。

男云々というより、私を自分の身近に置いておきたいのだ。

五年前におばあちゃんを肺炎で亡くしてからというもの、おじいちゃんは身内を自分の傍においておきたいという気持ちが強まったように思う。

多分、おばあちゃんが危篤になった時、仕事で海外に出ていて死に目に会えなかったことが影響しているんだろう。

そんなおじいちゃんの心境を慮つて、私たち従兄弟もなるべく会いに来るようにしているのだけど、とはいえ私が三条の会社に入るかどうかは別問題だ。

監視されながら仕事したり、人間関係にまで口出しされるのはご勘弁です。

私はその後も心配するおじいちゃん相手に「会社の人はみんなやさしくて良い人」で、「自分は男にはまったくモテないから心配ない」というある意味虚しい主張を繰り返し、来客が訪ねてきたのを機にようやく逃げ出した。

向かった先は一階のダイニング。

そこにはすでに正月の挨拶をすませた従姉妹の三人がいて、アップルパイを前にお茶の準備に入っていた。

「まなみちゃん、ちょうど良かった。アップルパイがあるからお茶にしましょう」

ポットを片手に声を掛けてきたのは、赤い振袖を着た舞ちゃんだ。

「アップルパイ！」

私は三条家のお抱えシェフの力作であるアップルパイに目を輝かせ、テーブルに直行した。

シェフの作ったアップルパイは、薄いパイ生地の上にシナモンなどで味付けされた林檎がのつていて、そこにバニラアイスが添えられている。

温かいパイと冷たいアイスが一度に楽しめてすごく美味しくて、もう毎日でも食べたい！ っと思うくらい。

三条家ではこのアップルパイを、使った林檎の皮で作ったアップルティーでいただくのが定番だ。林檎の香りに包まれながら、至福の時を過ごしたあと、私たちはお喋りタイムに突入した。

ひとしきりお互い近況報告をしたあと、私は気になっていることを尋ねた。

「舞ちゃん、一人暮らしはどんな感じ？ 真綾ちゃんと同じマンションだね？」

「しよっちゅうお手伝いさんが来てくれるから、一人暮らししている感じしないのよね」

ティーカップを持ちながら、眉間にしわを寄せる舞ちゃん。

舞ちゃんのマンションの部屋には、ほぼ毎日のように三条家から家政婦さんが派遣されていて、掃除、洗濯、部屋の片付け、それから夕飯の支度までしていくのだそうだ。

おじいちゃんか伯父さんの差し金なのだろうけど、そんな状況ならたしかに一人暮らししている気がしないのは当然だろう。

私も一人暮らししたいけど、そんな監視付きは絶対ゴメンだ。

まあ、舞ちゃんは去年、家出騒動を起こしている身だから、監視付きでも文句が言えないのだろうけど。

——去年の舞ちゃんの家出騒動。

許婚候補になるかも、なんて伯父さんに告げられたのが発端のアレ。

経過を思いつきり端折ると、舞ちゃんの居所はすぐに見つかった。伯父さんの予想通り、大学のお友達のところに行ったのだ。

だけど、本当の騒動になったのはその後の出来事だった。

舞ちゃんは「好きでもない人とは結婚したくありませんから。就職して一人で生活していくつもりです」と、迎えにきた伯父さんと兄である透兄さんに宣言したのだ。

許婚云々の話を聞かされる前から就職しようと決心していたらしく、内緒でこっそり経理の専門学校に通って資格まで取っていたという。

これを聞いて、伯父さんとおじいちゃんは大いに慌てた。結婚したくないというのもそうだけど、家を出て就職して一人で生活するなんておじいちゃんたちにしてみれば青天の霹靂だっただろう。

でも舞ちゃんの決心は固くて、何日もモメたらしい。

結局、透兄さんが折衷案を出した。

つまり「結婚は今のところ保留。就職をするなら三条系列のところに」という条件を出したのだ。ところが、これにも舞ちゃんは反発した。

「コネではなくて自分の力で就職したいの。三条の会社では働きません」
……どこかで聞いたような台詞だ……

まあ、そんなわけで半月くらい、「三条の会社で働け」「嫌です。働きません」とモメていたそうだ。最終的にはもう一人の従兄弟、瀬尾涼が間に入って、直系の家族よりは少しばかり遠い親戚が経営する瀬尾エンジニアリングに就職し、彼と彼の姉の真綾ちゃんがそれぞれ部屋を借りて住んでいる（持ち主はもちろん瀬尾家）マンションで舞ちゃんも暮らすという話に落ち着いた。

家事初心者な舞ちゃんのために家政婦を派遣するというのも、この時決められたこと。そして週末は用事がない限り、必ず三条家に戻ってくるというのも条件に加えられた。

まったく、どこまで過保護なんだろうか。舞ちゃんが一人暮らししている感じがしないという

のも当然だ。

セキュリティばつちりの瀬尾家所有のマンションじゃ、訪問客から何まで逐一監視されているだろうことは想像に難くない。

そんな一人暮らしはゴメンだ。というか、もはやそれは一人暮らしじゃない。

……私の時は、絶対そんなことはさせないんだから。

私はこっそり決意を新たにしたら。

「おまけに涼ってば、当然のような顔をして、私や舞ちゃんの部屋に入ってくるのよ」

そう言って苦笑したのは真綾ちゃんだ。

真綾ちゃんは実家の経営する瀬尾エンジニアリングで、父親でもある社長の秘書として働いている。

思いっきりコネだけど、コネとは思えないくらい立派に働いているらしい。

ハキハキしていて面倒見もいいで、一部の女性社員からはこっそり「真綾お姉様」と呼ばれているとか。ちなみにこれは舞ちゃんがこっそり教えてくれたこと。

舞ちゃんは経理課で働いている。ただし、自分が瀬尾家と親戚関係にあることはオープンにしないで、だ。

とはいえ、毎日の送り迎えは従兄弟の涼がしているらしい。

「相変わらず過保護だよね、涼は。きつと舞ちゃんは電車で行くって言ったのに、あいつに押し切られたんでしょ」

とは、真綾ちゃんの妹の真央ちゃんの弁。

年子の弟だからか、真央ちゃんは涼に容赦ない。

もつともそんな辛辣な態度にも、あの腹黒男はどこ吹く風のようにだけ。

私たち従姉妹が集まると、必ず話題に上るのが透兄さんと涼の過保護ぶりについての悪口だ。

なぜなら、おじいちゃん以上に私たち従姉妹に対して過保護なのは、従兄弟のその二人なのだから。それはもう過剰といえるほど。

「涼に文句を言ったら『この管理を頼まれてるのは僕だよ？』なんて澄ました顔して言うし、透よりタチ悪いよ。……もつとも、透だって同じマンションに住んでいたら、我が物顔で私の部屋に入ってくるに違いないけど」

ため息をつきながら真綾ちゃんが愚痴る。

同じマンションに住んでるっていつても、もちろん部屋は別々だ。けれどすべての部屋の合鍵をなぜか涼が持っており、姉弟、従姉弟とはいえ女性の部屋に平気で入ってくるというのだから、始末が悪い。

従姉妹たちの何とも窮屈そうな一人暮らしの実態を聞き、私は深いため息をついた。

「私も一人暮らししようと思っっているんだけど、絶対あの二人は反対するよね……」

「まなみちゃん、一人暮らしするの？」

ため息混じりにつぶやいた私の言葉に食いついてきたのは真央ちゃん。多分、私と彼女だけが親元で暮らしているからだろう。

「そういえば、通勤時間が長いって言ってたもんね」

「そうなの。一時間半以上も通勤に時間をとられるより、一人暮らしした方がいいかなと思って。住宅手当も出るし」

「でも……さ」

真綾ちゃんが言いにくそうに、口を開く。

「まなみちゃんは瀬尾や三条の世話にはなりたくないんだよね？ それだと、ハードル高いよ……」

おそろく」

高いハードル。

それはもちろん、あの二人のこと。

おじいちゃんは過保護で孫バカでも、一生懸命頼めば何とか折れてくれそうだけど、透兄さんと涼にはまるで通じない……だろうなあ。

「まなみちゃんの一人暮らし……は、私も兄様と涼が反対すると思う」

舞ちゃんまでもがそんなことを言う。それほど反対されるのは目に見えているということだ。

でも負けるもんかっ。

「私も、もう成人した大人、社会人なんだもの。従兄弟いとこの許可がなくなっただって、一人暮らししたければします」

勇ましく私が言った直後――

「却下」

ハモツた男二人の声がダイニングに響き渡った。

* * *

その声を目を向けてみれば、ダイニングに透兄さんと涼が入ってきたところだった。

三条コーポレーションの重役として、おじいちゃんと一緒に新年の挨拶を受けていた透兄さんはスーツ姿で、大学生の涼は正月らしからぬ至ってシンプルなセーターとスラックスという服装だ。

顔とスタイルだけは良い二人なので、性格のことを考えなければ非常に目の保養になります。そう、性格のことを考えなければ。

二人は私たちの座る六人掛けの丸テーブルにつかつかと近づき、同席の許可も取らずに空いてい

る席に着いた。三条家の広いダイニングにはまだまだ空いているテーブルがいくらでもあるというのに、だ。

透兄さんは席に着くやいなや、やれやれというようにネクタイを緩め、隣の席の真綾ちゃんの手で、透兄さんの手を伸ばし、勝手に飲んだ。

「ちよつと！ 人の紅茶を飲まないでよ！」

「朝から新年の挨拶にいらしたお客さんの対応に追われて、水分取る暇もなかったから喉が渴いてるんだ」

「だからって、なんで人のものを勝手に飲むの!？」

「紅茶が入るまで待つのが嫌だからに決まってるじゃないか」

「それくらい待てるでしょ！」

「待てないから、お前のを飲んで」

皆様どうですか、どう思いますか、この会話。

お前何様のつもりだ、と思うのは私だけじゃないよね？

傲慢、自分勝手、自己中。

いわゆる俺様——それが従兄弟の三条透だ。

透兄さんは舞ちゃんのお兄さんで、年は私より四つ上の二十六歳。

三条グループの御曹司で、三条コーポレーションという会社の営業企画部課長として第一線でバリバリ働いている。

会社では次期社長の名に恥じない……というか、それ以上の仕事の鬼として社員の尊敬を集めているらしい。ついでに女性社員の熱い視線も。

一八〇センチを超える長身で、端正な顔立ち。決して声を荒らげたりしないけど、従わずにはいられない声音。どんな時も冷静沈着。

モテる要素満載な男だけど、身内にとつては単なる俺様野郎だ。

身内——とくに私たち従姉妹に対してその俺様ぶりは顕著で、自分に従うのは当然と思っている節がある。っていうか絶対思ってる。

首を絞めてやりたいという顔で自分を睨みつける真綾ちゃんを完璧に無視し、透兄さんは今度は真央ちゃんを見て説教を始めた。

「真央、この間外泊したそうじゃないか」

「うっ。そ、それは、冬コミのコピー誌を作るために仕方なく友達の家泊まっただけ……」

「お前の家でやればいいじゃないか」

「うちだと、みんな広くて落ち着かないって言うんだもん。それに外泊のことだって、ちゃんとお母さんに連絡したよ。文句言われる筋合いないと思う」

「俺は外泊について聞いてない。……前にも言ったはずだ。外泊する場合は俺か涼に連絡しろと」
「い、言ってたけど……。っていうか、どうして外泊するのに透お兄ちゃんと涼の許可が必要なのよ！」

それは従姉妹全員が思っていることです、真央ちゃん。

だけど透兄さんはいつものように聞く耳を持たなかった。

「口答えするな」

「……うー。ハイ」

いかにも嫌そうな顔をして返事をし、真央ちゃんは自分の外泊を親から聞いて透兄さんにチクツた犯人をキッと睨みつけた。

だけど、睨まれた涼はどこ吹く風で、柔らかな笑みを姉に向けているだけだった。

ちなみに、私より一歳年下の真央ちゃんはいわゆる腐女子と言われる系統の女の子。

顔は可愛くて美人で、きつと大学でモテてるんだろうに、興味あるのは男×女の恋愛ではなくて、男×男の恋愛という禁断の世界。つまり、BL。

友達と同人誌も作っていて、年に二回夏と冬にはイベントに参加してる。

真央ちゃんが外泊のことで透兄さんにネチネチ言われている間に、そつなくお茶の準備を始めていた舞ちゃんが、三つのカップをお盆にのせてテーブルに戻ってきた。

透兄さんは新たに自分の前に出された紅茶を一気に半分くらい飲み、ゆっくりとカップをソーサ

ーに戻す。

そのカチリという陶器がぶつかる音が、私にはまるで何かの合図のように聞こえた。

「さて、まなみ」

透兄さんの切れ長の目が私を捕らえた。

あー。次は私の番ですか……

「お前の一人暮らしは認めない」

いきなり直球キター！

前置きもなく、私の意見を聞かず、いきなり自分の考えを押しつけるとはさすが俺様だ。

「俺と涼が選んだ物件でなら一人暮らししてもいいが、お前は三条や瀬尾の世話にはなりたくないんだらう？」

「絶対嫌」

「なら、一人暮らしも認めない」

透兄さんは話はずいたとばかりに、残った半分の紅茶を飲む。

私はそれを反抗的な目で見つめた。

透兄さんたちが認めなくとも、勝手に一人暮らしするんだから。

幸い、そこそ良い給料貰^{もら}っているし、住宅手当も出るから親元を離れても充分暮らしていける。お父さんとお母さんをしばらくの間、口止めして、部屋も三条と瀬尾系列の不動産を避ければ、一人暮らしが軌道にのるまで透兄さんたちにはバレないだろう。そうあれこれ考えてると、いきなり涼に呼びかけられた。

「まなみ」

透兄さんからその隣に視線を移すと、笑顔の涼と目が合った。

「無駄だから」

「え？」

「僕たちに隠れて一人暮らし始めちゃえ、って思ってるでしょ？ そんなの無理だから」

ど、どうしてバシてんでしようか、私が思ってたこと。

涼は私の引きつった顔を笑顔のまましばらく見つめ、爆弾を落とした。

「部屋が見つかったとしても、その契約、三日以内に潰^{つぶ}すよ。何度でも」

「ね？ だから無駄でしょ？」と、につこり笑う涼。でも目は笑っていない。

その笑顔の向こうに黒いオーラが見えて、私は恐怖に青ざめた。

見ると従姉妹^{いとこ}たち全員が、ドン引きした顔で涼を見つめている。

そんな中、一人透兄さんだけが涼の言葉を肯定するようにうなずいていた。

もうお分かりだろう。もう一人の従兄弟^{いとこ}——瀬尾涼は腹黒野郎だ。

涼は真綾ちゃんと真央ちゃんの弟で、私より二つ年下の二十歳。某有名大学の経営学部に通っている。

瀬尾グループの跡取り息子で、真綾ちゃんによれば学生の身分でありながら、すでに会社の経営に参加しているらしい。

身長は透兄さんよりちよつと低いくらい。天は二物を与えるのか、これまたくやしいくらいの美青年。

顔立ちは透兄さんが精悍^{せいかん}なのに対して、涼はもっと柔らかな顔立ちをしている。物腰もずっと柔らかい。笑顔が素敵だと女性に大人気……らしい。お腹の中は真つ黒なのに。

そして透兄さんの俺様同様、その腹黒さは私たち従姉妹に対して主に発揮されている。

「もう、どうしてそんなに私たちの私生活に口だすのよ！」

私は恐怖から立ち直ると腹立たしさのあまり、過去に何十回、何百回繰り返してきた台詞^{せりふ}を叫んだ。だけど、返ってくる答えはいつも同じ。

「俺たちには、お前たち従姉妹を守る義務がある」

「そう。だから大人しく僕らに守られてね」
だからその発想、おかしいってば。

この調子で私たち従姉妹に近付いてくる男もすべて排除してきた二人。その過保護ぶりは全員が二十歳を過ぎた今でも、付き合った男性も彼氏もいないという異常な状態を招いている。

この二人は私たちをどうしたいのだろうか。ゆくゆくは自分たちのお眼鏡にかなう男性でも紹介するつもりなのか、それとも一生未婚のままにしたいのか……？

どっちかというの後者のような気がしないでもない。

そういえば、主任との婚約話は、私たち従姉妹にきた初めての寿話なのだと改めて気付いた。

今の時点では舞ちゃんが筆頭候補として挙げられているけど、本人が嫌がっている以上、話是他の人のところにいくかもしれない。

聞いたことがなかったけど、舞ちゃん以外の他のみんなはどう思っているのだろうか。

「佐伯彰人氏のことだけだ」

と、いきなり私の心を読んだような話題が透兄さんの口から出て、ビクツとなった。ハッと顔を上げると、私を見ている透兄さんと目が合った。

「お前、同じ会社だろう？ お前から見てどういう人物だ？」

どうやら私に仁科主任の評判を聞きたいみたいだ。……というか全員の前で言わせたいのか。

「え、ええと……」

チラツと舞ちゃんの顔を見ると、彼女は顔をこわばらせていた。

他の面々は、どっちかという興味がある顔をしている。

これは、当たり前障りのないことを言うしかない感じ……

「い、いい人だよ。仕事できるし。仕事に関しては厳しいけど、それ以外は人当たり良い感じ。それで……ええとイケメンだから女性社員に人気がある」

恋人をとつかえひつかえなのは言わないでおこう。うん。

「そういえば今度、主任から係長に昇進することが内定しているよ」

「そうか……」

つぶやいてから、何を思ったのか黙り込む透兄さん。

私はこれを機にさつき疑問に思ったことを聞いてみることにした。

「透兄さんは、この佐伯さんとの結婚話についてどう思ってるの？」

「気に入らない」

サクツと言い捨てましたね。

でもさすがの透兄さんにもどうにもならないことのように、大きなため息をついて言った。

「じいさんにも何度も白紙に戻すように言っているが、頑固でな。どうあつても佐伯家と縁続きになりたらしい。今まで聞いた話を総合すると、どうもばあさんの方が向こうの奥さんと仲良くて子供たち、後年では孫たちを結婚させたいと望んでいたようなんだ。で、ばあさん亡き今、じいさんがその夢をかなえてやろうと熱心になつて。間の悪いことに向こうの奥さんもここ何年か具合が悪いみたいで、息子の佐伯社長もうちの親父もその望みをかなえてやりたいとじいさんたちに協力的らしい。白紙に戻すのは難しい状況だ」

「そうか、急に許婚の話が出たと思つたら、おばあちゃんからみだつたのか。」

「納得と同時に、三条の外孫に過ぎない自分が許婚候補の一人にカウントされる理由も分かつた。」

「結婚させたかつたのは三条と佐伯との縁を強固なものにしたいという理由ではなく、親類になりたいたいとおばあちゃんたちの希望のため。」

「だから結婚する人には三条の名も佐伯の名も必要ない。ただ自分たちの血を引いていければいいのだ。」

「こんな風に押しつけられるのは気に入らない。気に入らないが……ただ、家柄等を考えれば申し分のない相手だというのは認める。だから反対に聞きたい。お前たちはこの結婚話をどう思つてる?」

「そう言つて透兄さんは舞ちゃんを見る。」

「わ、私は前から言っているように、全然知らない人と結婚するなんて嫌です」

「真綾は?」

「私も押しつけられるのは嫌……かな。そもそも、その佐伯さんつて人と会つたことないから判断できないんだけど」

「真央は?」

「お姉ちゃんと同じく、判断不能」

「それじゃ、唯一彰人氏を知っているまなみは?」

「だ・か・ら、どうして私だけそんな風に聞くのかな!」

「私にこの結婚話を押しつけたのか? それとも単なる意地悪なのか?」

「と、とにかく、ここは慎重に答えねば。」

「……結婚とか判断できるほど、仁科主任と親しいわけじゃないから分らない。そ、それに、私は一般庶民だから大会社の社長の奥さんとかにはなりたくない……です」

「これは紛れもない本音。私自身は庶民だけどセレブな親戚がいるおかげでそういった世界も垣間見てるからこそ、その中に入りたくないのだ。絶対に。」

「そうか……」

「そう言つてまた透兄さんは黙り込んだ。」

「かわりに涼が口を挟む。」

「その理由じゃ白紙に戻すのは難しいね。人となりを知らないから嫌だというなら、会つてみるとか付き合つてみると言われるだけ。そもそも舞がダメでもこつちには他に三人も候補がいるから断

りにくいし」

そこまで言うと、涼はいきなり笑顔になった。綺麗な——だけど、背後に黒いものを背負った笑顔に。

「一番いいのは、佐伯彰人氏がよそで女性を孕ませて責任とって結婚とかしてくれることだよ。向こうは孫一人しかいないわけだから、三条の顔を潰さないでこの結婚話をなかつたことのできる」孕ませて責任とって……どこまで発想が邪まなんでしょうか……

この腹黒い台詞に、またもや引き気味の女性陣。

それにしてもこの発言。仁科主任がひっきりなしにいろんな女性とお付き合いしていることを知ってるのは確実だ。

だけど残念ながら涼の腹黒い願望通りにはならないと思う。だって、そのあたり仁科主任はしっかりしてそうだから。

歴代の彼女の中には彼との結婚を望んで妊娠という手段を取ろうとした人もいるはず。

何しろ佐伯のうしろだてがなくても美味しい物件だもんね、主任は。

でも成功したためしはない。

「まあ、そうなってくれば御の字だけだな。……とにかく、引き続きじいさんと親父を説得してみよ」

透兄さんがそう締めくくって、この話題は終わった。

そうこうしている間に透兄さんと涼がおじいちゃんに呼ばれて席を外し、私たち四人で盛大に従兄弟どもの悪口を言っているうちに帰る時間になった。

みんなと別れの挨拶を交わした後、おじいちゃん付きの運転手さんが車で家まで送ってくれるというので、玄関先で車が来るのを待っていると、おじいちゃんの所から帰ってきた透兄さんと涼に声をかけられた。

「まなみ」

「何？」

「一人暮らしのことだけど」と言われ、私は身構えた。

きつと再度認めないとか、勝手に一人暮らしを始めようとしても無駄だとか釘を刺しに来たに違いないからだ。

「そんなに身構えなくてもいいよ」

くすくす笑いながら涼が言う。

「僕たちは、まなみにチャンスあげようと思ってるんだ」

あげようって……だからどうしてそんなに上から目線なのでしょう、あなた方は。

でも、チャンスって……？

「一年間、きちんと規律を守って生活できたらな」と透兄さん。

「へ？」

「門限は夜の十一時。外泊はなし。これを一年間守れたら一人暮らしするのを認めてやる」

「へ？」

「定期的に叔母さんたちに連絡取って確かめるからね。バレないだろうなんて思わないように」と涼。
「……」

「……」

「……」

第3話 ほんの出来心

「上条さん、そのアニメーション取ってくれる？」

「はい」

四月です。

桜咲く季節。新しい生活を始める人も多いかと思えます。

なのに、私は今、新年度初^{しよ}端^{ぼな}の仕事が少ない時期に残業なんてさせられています……佐伯彰人氏と。正確に言えば、私の仕事のパートナーである一年先輩の男性社員さんなのですが。広いフロアの半分はもうすでに消灯され、何人か残っているのみ。

壁にプロジェクトで映し出されたプレゼン資料を修正するという作業に、企業調査チームの下
つ端である私たち二人が駆り出されているのには深いワケがある。

本来ならプレゼンは企業調査チームのエース田中雅史^{たなかみやし}主任がやるはずだったのだけど、彼が急遽^{きゅうそん}
出張してしまったため、このたび正式に昇進した仁科主任改め係長と私たちアシスタントがやるこ
とになったのだ。